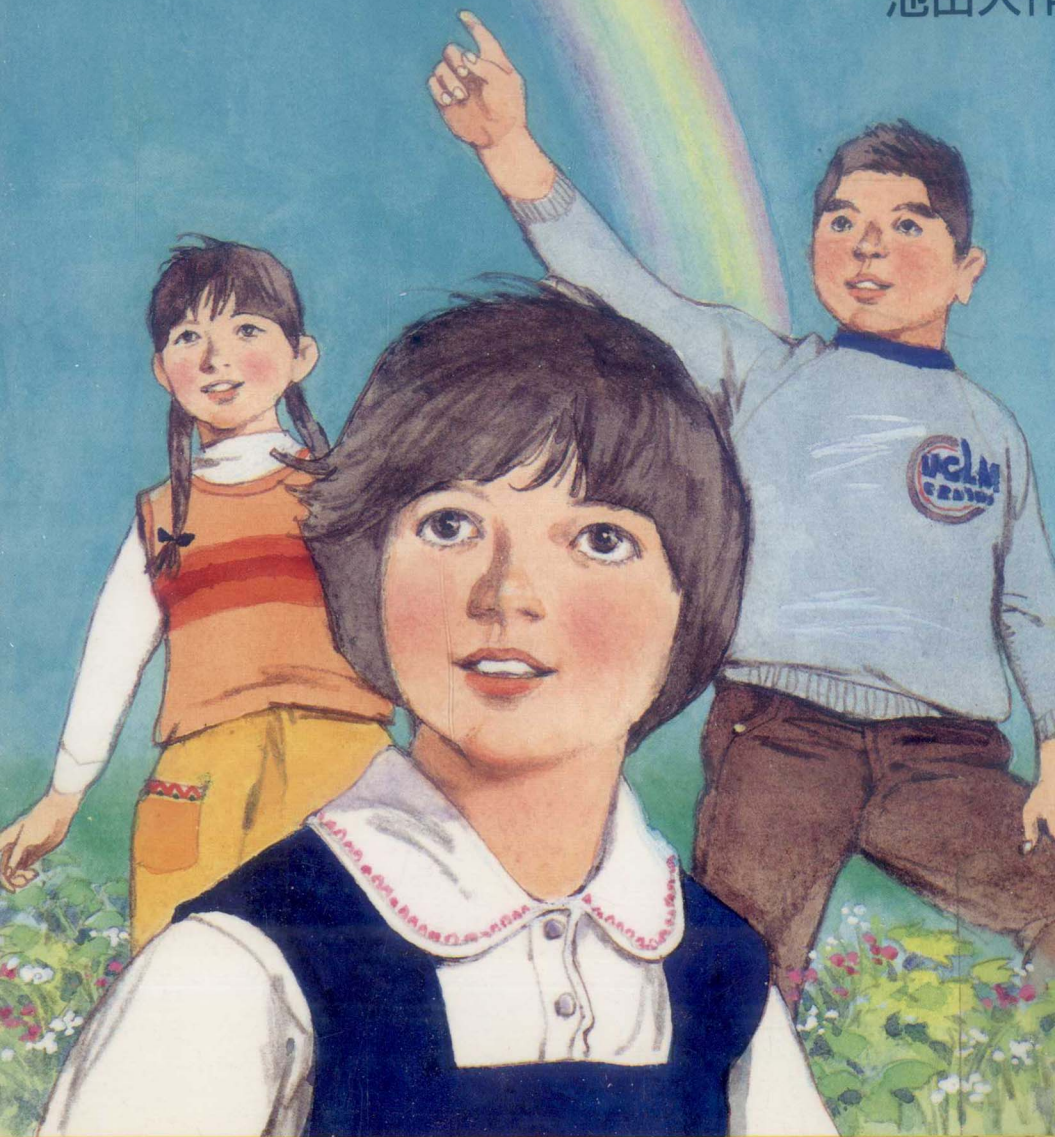


太平洋に^{にじ}かける虹

池田大作



太平洋に^{にじ}かける虹

池田大作・作 谷 俊彦・画



太平洋にかける虹

初版発行／1987年4月 第6刷発行／1987年6月

作 者／池田大作

画 家／谷 俊彦

発行所／株式会社 金の星社

郵便番号111

東京都台東区小島1丁目4～3

電話 東京(03)861—1861＝代表 振替／東京 0-64678

印刷／(株)平河工業社

製本／東京美術紙工

ISBN4-323-01223-3

乱丁・落丁本は、お取り替えいたします。 ©D. IKEDA 1987 Printed in Japan

日本音楽著作権協会(出)許諾第8671117-601号

も
く
じ



少女が中国からやってきた 6

青い目の人形エミリー 22

エミリーを助けて 37

「おく病の道」と「勇気の道」 45

緑の丘の学級会 61



玉蓮さんぎよくれんの宝物たからもの 72

友情ゆうじょうのリボン 85

「平和へいわの海うみ」をみみつめる 96

玉蓮さんぎよくれんとけん太けんた 108

「光ひかりの橋はし」をわたって 123

あとがき 139



■池田 大作（いけだ だいさく）

一九二八年東京に生まれる。

創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル（SGI）会長。
創価大学・創価学園・（財）民主音楽協会・（財）富士美術館・
（財）東洋哲学研究所等を創立。国連平和賞受賞。桂冠詩人の称号。
ケニア口承文学賞受賞。

主な青少年向け著書に『少年版人間革命』『若き友へ贈る』『少年に語る』『未来をひらく君たちへ』『少年抄』『今日のことば365』『青年の譜』『少年とさくら』『青い海と少年』『お月さまと王女』『雪国の王子さま』『青春抄』『友へ贈る』など多数。

■谷 俊彦（たに としひこ）

一九二二年東京に生まれる。川端画学校終了。日本美術家連盟、児童出版美術家連盟会員。小学館絵画特別賞受賞。児童書の装画の仕事として、『少年とさくら』『ニルスの冒険』『たから島』『しかのおうさま』など多数がある。

池田大作 作

谷 俊彦 画

太平洋にかける虹

にじ



少女が中国からやってきた

長いゆるやかな坂道をのぼりきると、見たすかぎり青いひろびろとした海がありました。左側には白い灯台が見えます。

海は、目にしみ入るような明るくすんだコバルト・ブルーの太平洋でした。かがやく光とさわやかな風、そして白い波——。大海原のキャンバスに、美しく動く自然の名画がありました。

光湖は、この太平洋に面した静かな町に住む、小学校の五年生です。

光湖は三人きょうだいの長女で、ふたりの弟がいます。上の弟は裕一、下の弟は幸二といいます。お父さんは灯台の職員です。働き者のお

母^{かあ}さんは家^{いえ}を守^{まも}っていました。

灯台^{とうだい}の見える^み、明る^{あか}い太陽^{たいよう}に近^{ちか}い緑^{みどり}の草^{くさ}の丘^{おか}にひとり立^たって、大^{おお}きく胸^{むね}をはって息^{いき}をすいこむと、心^{こころ}がすがすがしくなり、水平線^{すいへいせん}のかなたまでふくらんでいくようです。

それは四月^{がつ}のある日^ひのことでした。学校^{がっこう}から帰^{かえ}ってきた光湖^{みつこ}は、ランドセルをおくなり、大^{おお}きな声^{こえ}でいいました。

「おばあちゃん。おばあちゃん。きょうね、クラスに転校生^{てんこうせい}がきたのよ。」

光湖^{みつこ}はフミおばあさんがだいすきです。むかし、小学^{しょうがっこう}校^{せう}の先生^{せんせい}をしていたおばあさんは、光湖^{みつこ}が小^{ちい}さい時^{とき}から、本^{ほん}を読^よんでくれたり、いろいろなことをやさしく教^{おし}えてくれました。光湖^{みつこ}は、フミおばあさんと話^{はな}しているとき、なぜか不思議^{ふしぎ}に安心^{あんしん}してくるのです。だから今^{いま}でも、学校^{がっこう}での出来事^{できごと}や友^{とも}達^{たち}のことなど、毎^{まい}日^{にち}、なんでも話^{はな}さずにいられません。

なかでもきょうは、特別な一日でした。転校生がくるだけでも、ときすることなのに、なんと外国からの友達なのです。

「おばあちゃん、どこの国からだと思う。」

フミおばあさんはにこにこわっていました。

「中国ですって。パンダのふるさとよ。」

「中国かい。おとなりだね。」

「おばあちゃんは、まるでとなりのおうちみたいにいるのね。」

光湖はクスツとわらいました。

「そうだよ。家だって、国だって、みな同じだよ。みんな、おとなりどうし、仲よくするのがいちばん大切なことですからね。」

おばあさんはきつぱりといいました。

光湖は、髪をきれいにやさげにした、ひとみの大きな少女のことを思いうかべていました。



「周玉蓮さん」

と、先生が黒板に大きく書いてしうかいすると、ザワザワしていた教室は、いっしゅん静まりました。少女はびよこんと小さくおじぎをしました。

玉蓮さんのお母さんは、日本人です。家族みんなで、中国から日本へやってきたのです。

玉蓮さんは、たどたどしい日本語であいさつをしました。おとなしそうな顔が、見るからにきんちようしています。光湖は玉蓮さんが一目でだいすきになりました。

（お友達になれるかな。わたしも中国の言葉を話せたらいいな。）
と思いました。

うれしそうな光湖の顔を見ながら、おばあさんは、

「光湖が玉蓮さんをすきなら、玉蓮さんもきつと光湖をすきになるよ。心はかならず通じるものなんだよ。」

とはげました。

翌日のことです。朝から、空はどんよりと雲がたちこめていました。学校にいくと、光湖はともおどろきました。教室の黒板いっぱいに、玉蓮さんの悪口が、らんぼうな字で書いてあるのです。

犯人はだれにもすぐわかりました。けん太を中心とする、いつものいじめっ子たちのしわざにちがいありません。

けん太は体が中学生のように大きい生徒でした。力が強くて、これまでも、何かにつけていじわるをくり返しては、みんなにきらわれているのです。

おとなしい子や、どこか人とちがった目立つところのある子がいると、わざといやがることをします。掃除当番などをおしついたり、お金をと

ったり、持ち物をかくしたりします。ほかの人に命令してひとりを仲間はずれにすることもあります。

なかには、それがつらくて、学校を休む子もいました。けれども、先生にうったえようものなら、「告げ口」したといわれ、かげで何をされるかわかりません。

光湖は正しく強く生きたいと、いつも思っていました。また「やさしい心でお友達と接していきなさい。」と、小さい時からおばあさんや祖母さんからいわれていました。

——玉蓮さんのしょんぼりした、悲しそうな姿を見ると、光湖はいじめっ子たちへのいかりがこみあげてきました。でも、知らん顔してすましていくけん太たちに、真正面から向かっていく勇氣はできません。

「先生がくるわよ！」

とさけんで、黒板を急いで消すのがせいっぱいでした。それだけでも、



けん太たちの目がこわくて、胸の中で心臓がすごい速さで鼓動するのがわかりました。光湖は席にすわるとき、玉蓮さんのほうをちらつとふり返ってみました。

玉蓮さんは、くちびるをぎゅっとかみしめて、悲しそうに顔をふせていました。

新学期がはじまっていく日かがたちました。玉蓮さんは、まだ日本語がよくわからないせいもあってでしうか、授業中でもうつむきがちです。ある日の休み時間のこと。けん太たちのしつこいからかいの声に、玉蓮さんは立ちあがって、小さな声で、

「不要（やめてください）。」

といいながら、とうとう教室からでていってしまいました。

これまでも何人かこんなふうにいじめられてきました。いじめっ子は